

# 元野地区遺跡

## (本野遺跡・高野原遺跡)

県営農地保全整備事業元野地区に  
伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告



1993

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

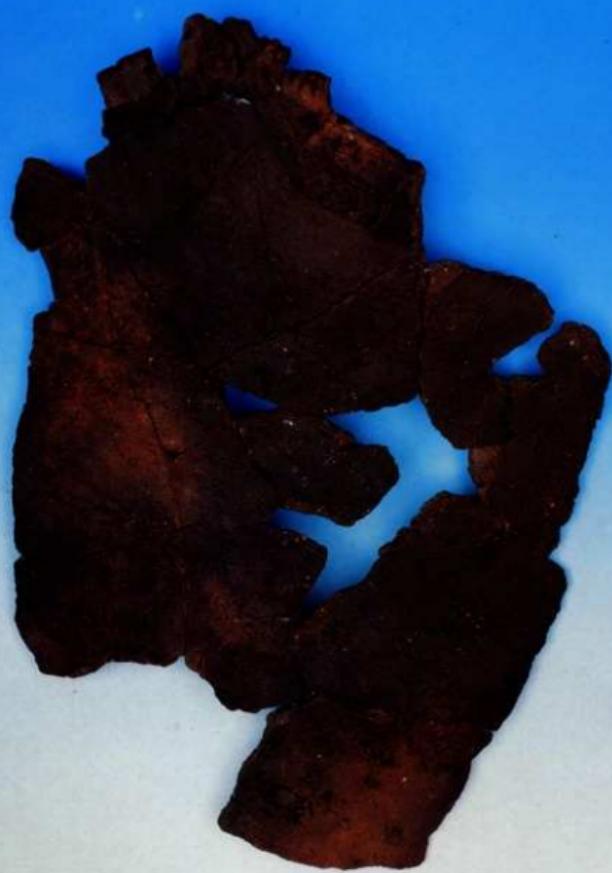
# 元野地区遺跡

(本野遺跡・高野原遺跡)

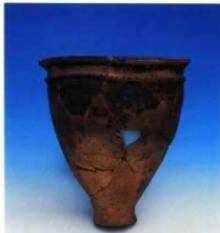
県営農地保全整備事業元野地区に  
伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告

1993

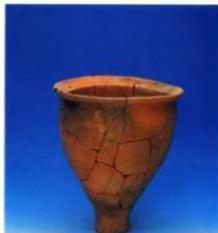
宮崎県宮崎郡田野町教育委員会



縄文時代中期の土器



豊穴 11



豊穴 7



豊穴 5



豊穴 5



豊穴 7

弥生時代の土器



本野遺跡 E・F 区遺構検出状況

## 序

田野町では、前平地区をはじめとして各地で農地開発事業などに取り組んでまいりましたが、平成4年度から元野地区においても県営農地保全整備事業が実施されることになりました。これに伴い教育委員会では遺跡の保存について協議し、現状保存が不可能な部分を発掘調査いたしました。

調査の結果、縄文時代から古墳時代にかけての遺構や遺物が多量に発見され、特に縄文時代中期の資料の豊富さについては、県下でも有数のものあります。

これらの資料が、歴史研究はもとより今後の生涯学習において大いに活用されるものと確信しております。

平成5年3月31日

田野町教育委員会  
教育長 鍋 倉 政 信

## 例 言

1. 本書は、元野地区県営農地保全整備事業に伴い、田野町教育委員会が実施した『本野遺跡』『高野原遺跡』の調査結果概要を報告するものである。

2. 調査は次の体制で実施した。

調査主体 田野町教育委員会

調整担当 田野町教育委員会社会教育課 係 長 長友 啓泰

庶務担当 田野町教育委員会社会教育課 主 査 長友 カッ子

調査担当 田野町教育委員会社会教育課 主任主事 森田 浩史

調査指導 宮崎県教育庁 文化課

3. 調査の実施にあたり、その作業の一部を次のとおり委託した。

遺構写真測量及び写真撮影 「㈱スカイサーベイ」

自然科学分析 「仰古環境研究所」

地下レーダー探査 「マイアミ大学音響地質研究所 中島研究室」

\* 地下レーダー探査の実施にあたり、奈良国立文化財研究所発掘調査技術研究室長の西村康氏より貴重な助言、ご指導を賜った。.

4. 現地の調査には、作業員として田野町内をはじめ清武町・山ノ口町から参加をいただいた。

5. 遺物整理等の室内作業には安藤チトセ・開地浪子・川越トミ子・富中優子・船ヶ山優子・山脇はまよらの補助を得た。

6. 本書の執筆・編集は森田がおこなった。

7. 本書で用いた方位は磁北、標高は海拔絶対高である。

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

田野町では前平地区・七野地区・八重地区をはじめ各地で農地保全整備等が実施されてきたが、平成4年度より元野地区においても県営農地保全整備事業に着手することになった。今年度の計画区域は既に平成元年度に実施された町内遺跡詳細分布調査で「本野遺跡」として指定されており、その保存等について早急に検討する必要が生じたので平成4年2月に県文化課による試掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代前期から弥生時代にかけての複合遺跡であることが確認された。

その後、県文化課と中部農林振興局農林振興局の間で協議が行われ、同年9月22日に町教育委員会を含めた3者で、遺跡の保存方法について具体的な協議を行った。その結果、工事施工上で盛土等の保存が不可能な部分について、発掘調査による記録保存の措置を講じ、他は現状保存することで合意に達した。

また、これと併せて次年度以降実施予定の「高野原遺跡」で地下式横穴墓の所在が予想される区域について確認調査の依頼があり、平成5年1月6日に詳細な協議を行い、地下レーダーによる探査を実施することとなった。

現地における調査は平成4年10月16日より着手し、平成5年1月28日に完了した。

### 第2節 遺跡の位置と歴史的環境

田野町は宮崎県中南部の宮崎市西方約20kmの田野盆地を中心とし、東西・南北に約14km、総面積は109,01km<sup>2</sup>に至る。田野盆地は南那珂山地の北西部にあたる標高200m以下の台地上に、西南西に大きくなり込んだ地溝上の凹地である。

田野町元野は役場から南西約25kmの比較的大な台地上にあり、南方に標高1,000mを越える鶴塚山を望む。台地の周囲には清武川に至る片井野川と別府田野川支流の元野川が流れ、遺跡が當まれるに絶好の条件下にあり、以前から土器や石器等がしばしば表面採集されていた。昭和54年には耕作中に地下式横穴墓が発見され、地点等の詳細な記録はないが発掘調査の事例もある。また、近隣には七野地区遺跡（九野第2遺跡・長蔽遺跡）、黒草地区遺跡（黒草第1～3遺跡）井出ノ尾遺跡をはじめとする既に発掘調査が実施されたものの他、遺跡詳細分布調査により発見された遺跡が多数所在する。

丸野第2遺跡では縄文時代早期の条纹土器・押型土器、前期の曾畠式土器、後期の指宿式土器・松山式土器・市来式土器・草野式土器・小池原式土器・鐘崎式土器・弥生時代後期の土器やこれらに伴う石器等が出土し、縄文時代後期の堅穴住居が計26軒検出された。

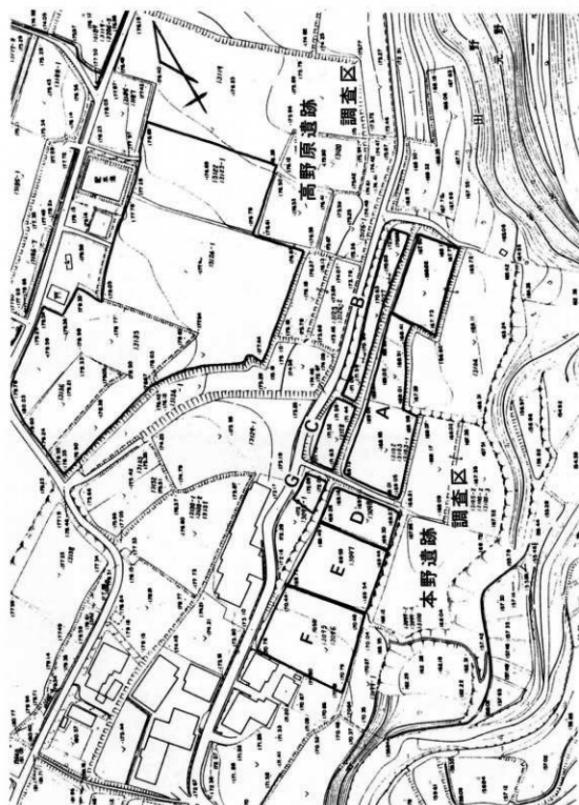
黒草第1～3遺跡（旧称：黒草遺跡）は縄文時代後期を中心とするもので、昭和46年に宮崎大学史学研究部考古学班が実施した発掘調査では市来式土器・綾式土器等の出土が報告されている。

井出ノ尾遺跡では縄文時代早期の岩本式土器・前平式土器・下剥峰式土器・桑ノ丸式土器・手向山式土器・塞ノ神式土器とこれらに伴う石器が出土し、集石遺構が検出された。



町内遺跡分布図

-2-



平成4年度 調査区配置図

-3-



高野原遺跡・本野遺跡調査着手前全景



本野遺跡調査状況全景

## 第Ⅱ章 調査の結果

### 第1節 調査の概要

本野遺跡は元野川左岸の河岸段丘上の緩斜面に営まれる。調査は地形等から便宜的にA・B・C・D・E・F・G区を設定して実施した。

各調査区における地層の残存状態は様々であったが、基本的に右図のような層で構成される。このうち第Ⅲ層は弥生時代、Ⅳ～Ⅵ層は縄文時代中・後期、Ⅶ層は前期の遺物包含層であるものと想定されるが、今後の遺物整理等の段階で明確にしていきたい。

縄文時代前期は「轟式・曾畠式」が、中期は「船元式系」等の瀬戸内地域の影響を受けたものや南九州で一般的に見られるものが新旧入り混じって出土している。後期は「市来式」に相当するものが出土した。また、少量であるが晚期の土器片も出土した。各時期に伴う遺構は明確ではないが、A・F区において集石遺構や土坑が検出された。

弥生時代は、中期末から後期初頭とみられる遺物がB・F区で出土しており、F区において堅穴住居が13軒検出された。

### 第2節 縄文時代の調査

主に第Ⅳ～Ⅶ層を対象におこなった。調査地点によっては開墾による削平をかなり受けている所もあり、またアカホヤ層より下については一部調査を試みたが、遺物等は見られなかつたため、すべてアカホヤ層上面までにとどめた。

遺構は第VI・VII層の上面において集石のほか土坑状の落ち込みも確認したが、不整形なものが多く、風蝕倒木との判別が困難な状況であった。遺構内からの出土遺物は極めて少ないが、検出層位や埋土等から主に中期のものと考えられる。

I	耕作土 10YR黒褐色2/3
II	2.5Y黒褐色3/1
III	10YR黒褐色2/1
IV	10YR黒色1.7/1
V	2.5Y黒色2/1
VI	10YR黒褐色2/2
VII	7.5YR黒褐色2/2
赤ホヤ (火山灰) 堆積層	

本野遺跡基本土層  
柱状図



A区遺物出土状況



C区作業風景

縄文時代前期の遺物は主にA区東側・B・E・F区から第V層を中心出土した。土器は断面三角形あるいはミミズバレ状の貼付帯が施される轟B式から、曾晳式の新しい段階のものまでが見られる。石器も若干出土したが、時期を判別しうる特徴的なものは現段階では確認していない。

中期は第V・VI層を中心にIII層まで見られた。当遺跡においては最もバリエーションに富む時期であり、その出土量も非常に高い比率を占める。各調査区から出土したが、とくにF区において密集した状況が見られた。これらは縄文を地文とするものと条痕文を地文とするものに大別される。船元式（系）と春日式に比定される新旧の各段階ものが各層において混在する。石器については前期と同様に詳細な分類作業等をおこなっていながら明記しないが、第V・VI層を中心に石礫・石匙・石斧・石核・剝片・すり石・石皿？が出土した。

後期はA区東側・B区を中心に出土した。これらの大半は貝殻腹縁による連続刺突文を施すもので、市来式土器に比定しうるものである。

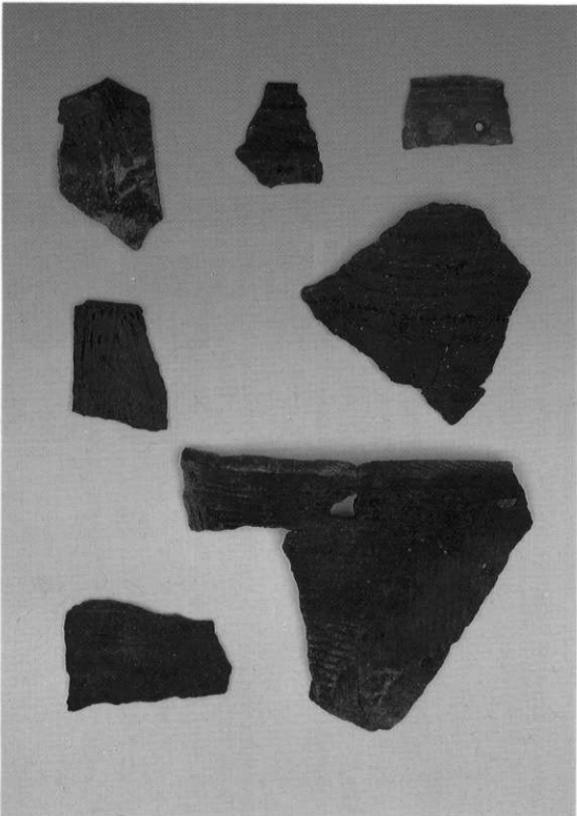
これらは、B区から内外面に密なミガキを施した黒色磨研土器が、C区から前者よりやや粗製なもののがそれぞれ1点出土している。

#### 〔参考文献〕

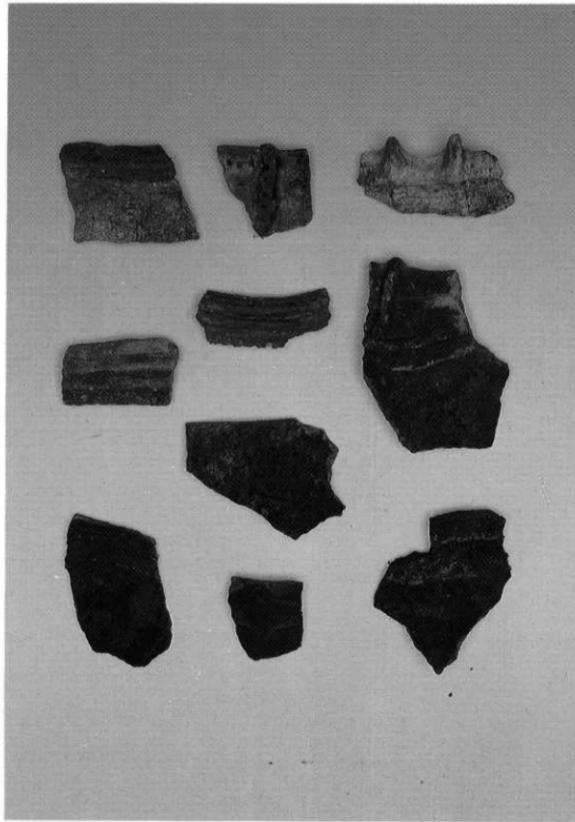
- 東 和幸「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』No.5 1991南九州縄文研究会
- 「丸野第2遺跡」田野町文化財調査報告書 第11集 1990 田野町教育委員会
- 「天神河内第1遺跡」1991宮崎県教育委員会
- ・都城市教育委員会の桑畠光博氏には、今後の室内調査をすすめるにあたっての貴重な助言・ご指導を賜った。



F区遺物出土状況

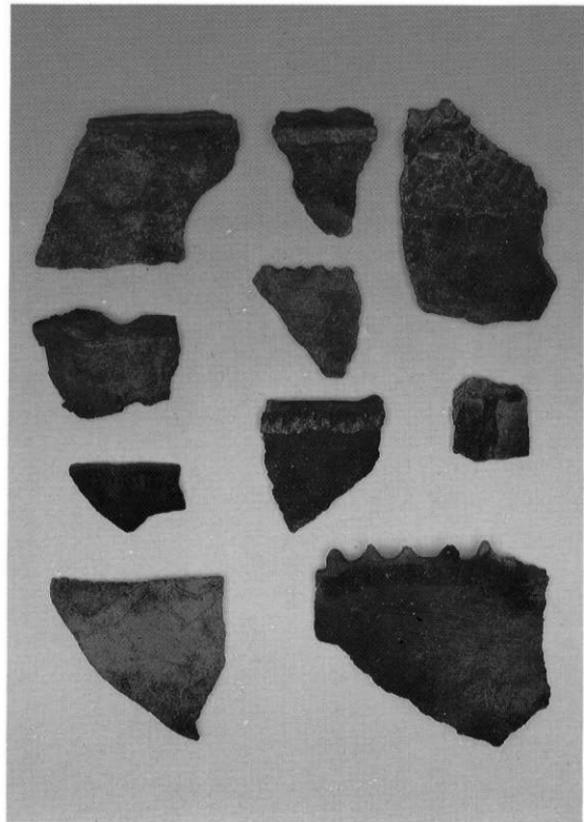


縄文時代前期の土器



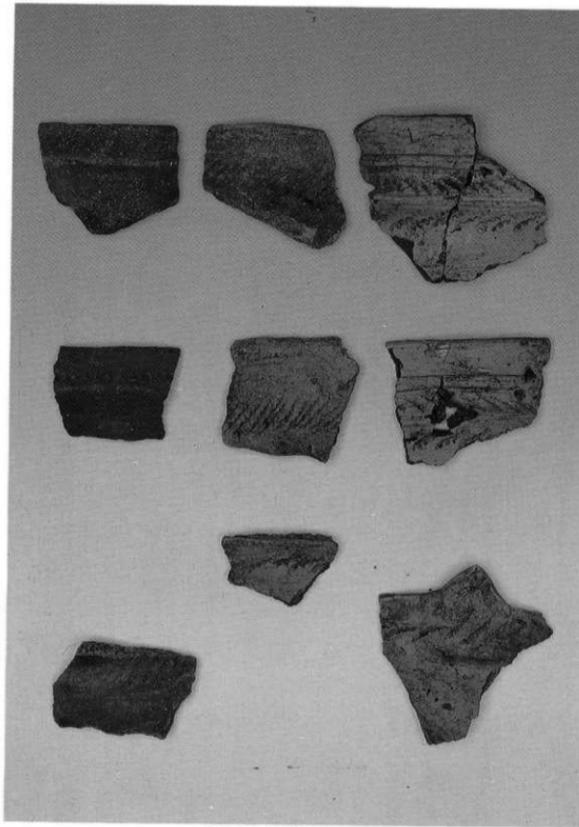
縄文時代中期の土器

- 8 -



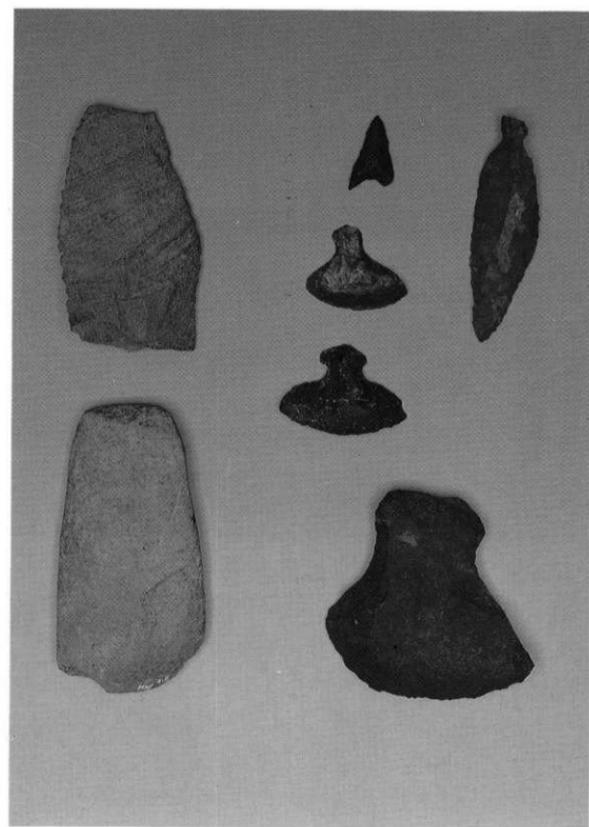
縄文時代中期の土器

- 9 -



縄文時代後期の土器

- 10 -



縄文時代の石器

- 11 -

### 第3節 弥生時代の調査

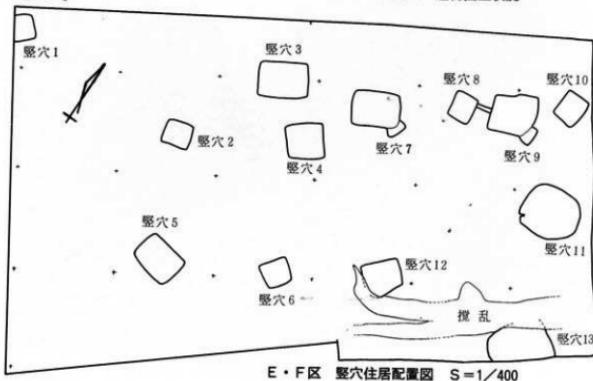
弥生時代の遺物はB区の一部とE・F区において出土したが、遺構はE・F区のみで竪穴住居が検出され、E区からF区東半にかけて密な分布状況が見られた。竪穴住居のプランは楕円形の竪穴11と攪乱により明確にできなかった竪穴13を除いて方形を呈する。竪穴7と9はいずれも同一方向に張り出し部を有する。竪穴1・2・6・8・10は他よりも比較的小規模なものである。D区についてはその痕跡すら見出せず、農地の開墾等によって削平消滅した可能性も考えられるが、おそらくここが集落の東端にあたるものと想定される。これらの中には、柱穴等の検出されなかったものもあるが、ここでは竪穴住居としてとりあげた。今後の報告書作成の段階で詳細な検討をおこないたい。

包含層はB区のみ残存しており、大型の甕の破片が出土した。竪穴住居からは覆土内及び床面直上において甕・壺・鉢・石皿(?)・磨製石鐵・磨製石斧・砥石等が出土したが高环は現在のところ確認していない。

これらの大半は中期末のものとみられ遺構の埋没時期が設定しうるが、切り合い等は一切見られないため、新旧関係やグルーピングについては遺構の位置関係や遺物の詳細な検討をおこないながら明確にしていきたい。



竪穴11 遺物出土状況



竪穴 1



竪穴 3



竪穴 4



竪穴 6



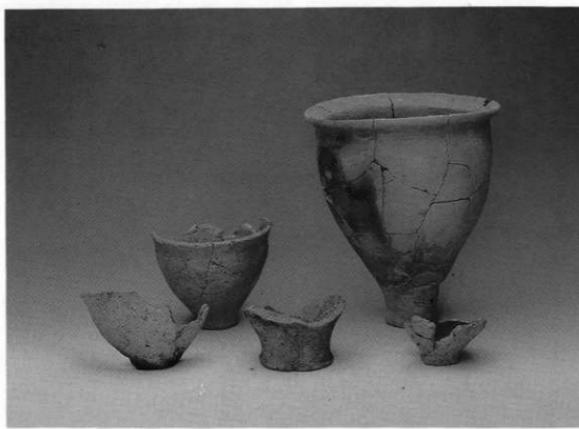
竪穴 5



竪穴 7



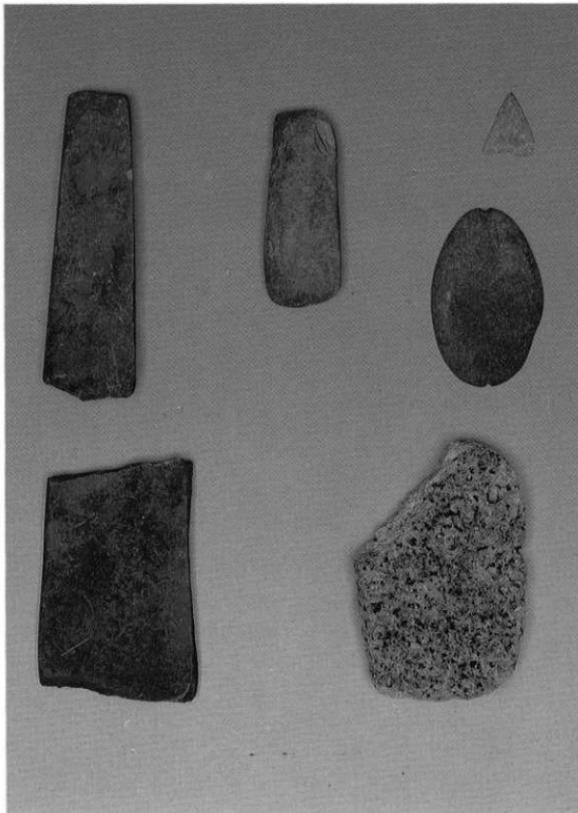
竪穴 9



竪穴住居の出土遺物



竪穴住居 4 の出土遺物



豎穴住居出土の石器

- 16 -

#### 第4節 自然科学分析調査の結果

当調査では、遺跡に含まれる情報を最大現に引き出すことを目的として「テフラ（火山灰）検出分析及び屈折率測定」「植物珪酸体分析」「樹種同定」「種実同定」等の自然科学分析を実施した。

テフラ検出分析及び屈折率測定はC区北壁とD区東壁においておこなった。分析の結果文明軽石（桜島＝AD1471年）・御池軽石（霧島＝約3000年前）・鬼界アカホヤ火山灰（鬼界カルデラ＝約6500年前）等を確認した。当遺跡の基本層位では第V層が御池軽石を含む層第VII層が鬼界アカホヤ火山灰層にある。

植物珪酸体分析はD区東壁においておこない、古植生及び古環境の推定がなされた。分析の結果、最下部の褐色土から黒（暗）褐色土中位にかけてクマザサ属を主体としスキ属やチガヤ属なども見られるイネ科植生が継続され、鬼界アカホヤ火山灰直下層ではクマザサ属が減少してネザサ節を含んだイネ科植生が主体となり、同火山灰堆積による一時的な破壊のチネザサ節が早期に再生して、この繁茂が比較的最近まで継続され、また御池軽石堆積以降はシイ属などの照葉樹が見られるようになったとの推定を得た。耕作については文明軽石の堆積後に開始され、その栽培形態は遺跡の立地条件や植物珪酸体組成などから、畠作（陸稲）であった可能性があるとの分析を得た。

樹種同定は豎穴住居3と8から出土した炭化材についておこなった。分析の結果、豎穴住居3から出土したものは関東地方以南の照葉樹林帯下部に分布する常緑高木のツバキ属とシイ属で、豎穴住居8から出土したものは常緑小高木でツバキ科のサカキであったことが明らかとなった。

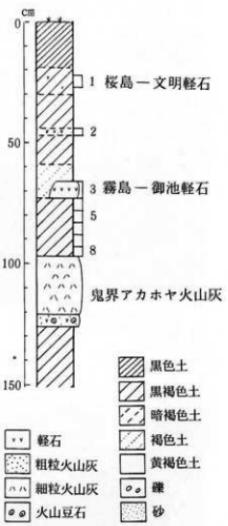
種実同定は豎穴住居12から出土したものについておこない、全てイチイガシの種子であるとの結果を得た。

以上の分析結果から、遺跡を復元する際の貴重な情報を得ることができた。今後の報告書作成段階において大いに活用したい。尚、結果報告の詳細についてはその資料を田野町教育委員会が保管している。

#### 〔引用文献〕

「自然科学分析調査報告書－本野遺跡－」1993

有限会社 古環境研究所



E区側土層柱状図  
及び凡例

- 17 -

## 第5節 高野原遺跡の調査

当遺跡は次年度以降の工事予定地であるが、以前地下式横穴墓が発見されていることから、その所在及び分布を明確にするため「地中レーダー探査」による事前の確認調査を実施した。調査は地下式横穴墓の発見地及びその周辺を対象として、A～F区の6ヶ所を設定した。

調査の結果、とくにA・B・C区において反応が見られた。その他D・E・F区では特徴的な反応は見られなかった。A区においては前述したように、既に1ヶ所発掘調査が実施されているが比較的多くの反応を得たので、数基の現存が考えられる。B区においては以前耕作中に地下式横穴墓の部分が陥没した例がある。また、アカホヤ下の層において縄文時代の石皿を確認している。C区においてはマウンド状に傾斜する地形が見られ、埴丘を有する古墳もしくは地下式横穴墓に伴ううな墳丘の一部であった可能性も考えられる。

以上の結果、地下式横穴墓の調査から更に下層の縄文時代の調査へ迅速に移行するための、貴重なデータを得ることができた。今後の調査で有效地に利用していきたい。尚、結果報告の詳細については、その資料を田野町教育委員会が保管している。

### 〔参考文献〕

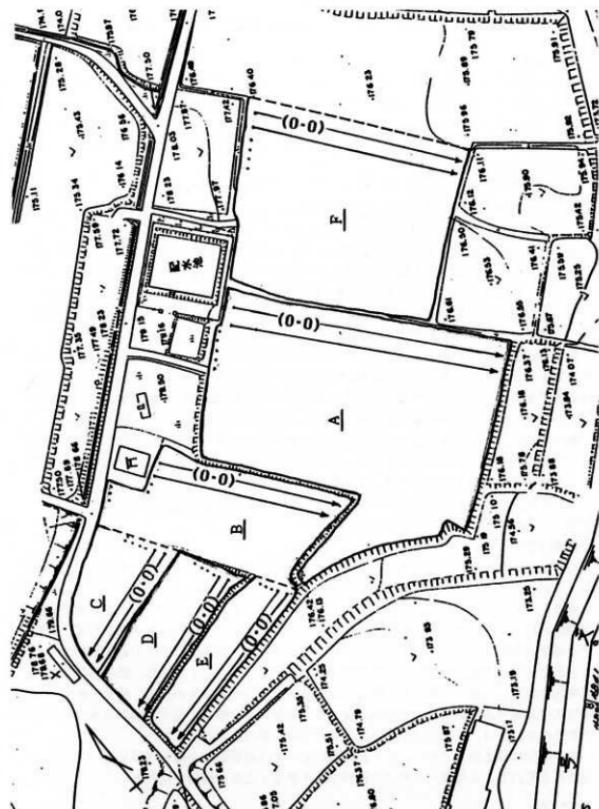
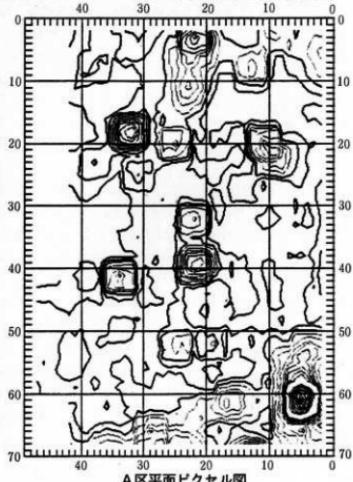
「元野地区地中レーダー探査報告」1993 マイアミ大学地質音響研究所中島研究室



F区作業風景



B区作業風景



高野原遺跡調査区位置図

### 第三章 おわりに

#### 〔本野遺跡〕

調査の結果、縄文時代前期から中期・後期・晩期と弥生時代中期末の複合遺跡であることが明らかとなった。以下、各時代・時期別に要点をまとめておきたい。

縄文時代前期の遺物は、鬼界アカホヤ火山灰の堆積以降に形成された第VII層から主に出土し、土器は縄式と曾畠式がある。各調査区において分布するが、いずれも密集した状況では見られなかった。

中期の遺物は、第VI層以降からの出土であるが、特に第V・VI層を中心とする。第VI層は御池軽石（ボラ）の堆積を含む層であることが、テフラ検出分析及び屈折率測定によって同定された。土器の出土量は縄文時代の中でも最も多く、器形・文様もバリエーションに富み、船元式（系）の比較的古い段階のものから春日式の新しい段階に比定しうるものを見られた。これらの中でも条痕を主体とするものが多くを占める。各調査区において分布するが、特にF区の中央から東方に向けて密集した状況が見られた。遺構として認識しうるものは土坑・集石が数基検出されるにとどまったが、いずれにせよ中期にある程度継続して集落が営まれたと推察することも可能であろう。

後期の遺物は第IV層から主に出土し、A・B区を中心に分布する。土器はすべて市来式に比定しうるものである。また、晩期の土器がB・C区から出土した。B・C区の地形は緩斜面であるが、A区へはやや急な段差を有するため、更に北側（高野原遺跡）への拡張が或いはそこからの自然現象による移動があった可能性も検討しておく必要があろう。

弥生時代はE・F区を中心に分布し、B区においても少量ながら土器が出土した。竪穴住居の分布はやはりE・F区に限られ、D区及びその北側へ拡がる可能性は地形等から判断して殆どないものと推察される。平面プランは方形が大半であるが、中でも長方形のプランに張り出し部を有する竪穴7・9については、いわゆる花弁型住居（日向型間仕切り住居）の一類型として捉えておきたい。

#### 〔高野原遺跡〕

高野原遺跡は現在のところ元野地区の最も広大な台地のはば全域をその範囲としているが、これは主に詳細分布調査の結果をもとに線引きしたものであり、地点によってはかなり性格を異なる遺構の所在が推察される。今回調査した地点においては以前に地下式横穴墓が発見されており、部分的な調査例もある。当調査では発見地点を中心として、未発見の地下式横穴墓をターゲットに地中レーダーによる探査を実施し、その分布を推定することができた。また、石皿の所在を地中レーダーがとらえたことにより、縄文時代早期の遺物包含層を発見するに至った。前記の本野遺跡の調査結果とあわせて、縄文・弥生・古墳時代の遺構や遺物が所在する複合遺跡である可能性を予察しておく必要があろう。今後の調査においては、この点に十分留意しながら取り組みたい。

尚、本書は概要報告であり、また現段階においては遺物破片の復元作業も儘ならない状況である都合上、未掲載・未整理の資料が多々あることをご周知いただきたい。

#### 〔参考文献〕

- 「自然科学分析調査報告書－本野遺跡－」1993 有限会社 古環境研究所
- 「元野地区地中レーダー探査報告」1993 マイアミ大学地質音響研究所中島研究室

